

【別紙2】

審査の結果の要旨

氏名：木場智之

木場智之氏の論文「フランシスコ・デ・ビトリアにおける「法」の問題系：特免・基本法・公会議」は、近世スペインのスコラ学（いわゆるサラマンカ学派）初期の代表的学者であるフランシスコ・デ・ビトリア（1483-1546）が1534年に行った講義に基づく『教皇・公会議の権力について』（以下、『教皇・公会議論』という。）を主要史料として、ビトリアの学説に関する詳細な検討を行った研究である。先行研究はビトリアの所論の一部のみを重視して、彼の立場が教皇主義（カトリック教会の体制の中でローマ教皇の優位を強調する考え方）と公会議主義（カトリック教会の体制の中で信者全体を代表する一般公会議に大きな役割を認める考え方）のいずれに属するかを議論してきた。それに対して本論文は、『教皇・公会議論』で多く論じられている、ローマ教皇が与える特免（一般的な法的義務を個別的に解除する行為とビトリアは理解した）の問題を正面から検討し、更にビトリアが前提とした先行する議論やテキストを視野に入れて、ビトリアの議論全体の構造と特質の解明を試みている。そうした作業を経て、本論文は、ビトリアが先行する議論やテキストを踏まえつつも、教皇による特免に対する制約の可能性をより広く認めようとつとめる中で、特免され得ない実定法という独自の観念を打ち出した、という結論に至っている。

以下、論文の要旨を述べる。

第1章「序論」は、サラマンカ学派およびビトリアについての研究状況を概観し、そこに残る問題点を確認したうえで、本論文の課題を提示する。サラマンカ学派については近年になってその重要性が認識ないし再評価されて、各国で多様な研究が開始されているが、教会法に関する論点や、法の神学的基盤の面では、必ずしも十分な検討がなされているわけではない。ビトリアについては従来から彼の国際法論などに関して研究がなされてきたものの、主要著作のうちで突っ込んだ検討の対象となつてこなかった作品も残っており、『教皇・公会議論』もその一つである。先行研究は、ビトリアの立論を教皇主義か公会議主義かのいずれかの立場に分類するのに急で、彼の議論の歴史的基礎を十分にふまえていない。また、上述のサラマンカ学派研究一般の問題点を反映して、そもそも作品の主題である特免の歴史と法的意義について理解を欠く。そこで、これらの欠点を克服するための手順を踏んだうえで、『教皇・公会議論』を読み解くことが、論文の課題として設定される。

第2章「公会議と特免」の前半はビトリア以前の公会議をめぐる議論を概観する。12世紀に成立した『グラティアヌス教令集』の注釈者たち（デクレティスト）は、教皇が信仰問題において誤ることがあり、異端教皇は来世で裁かれ、法的権力と知恵が区別され、教皇が

公会議を尊重する、といった『教令集』の文言にもとづいて、信仰における公会議の優位や、異端に陥った教皇の廃位を述べた。その後次第に教皇の優位が定式化されるが、教皇座が団体を形成し、それゆえ団体法的制約に服するという理解は残った。1378年の教会大分裂から15世紀初めのコンスタンツ公会議の時期には、公会議が信仰だけでなく教会の改革の領域でも教皇に優位し教皇に対して強制力も行使しようという公会議主義の議論が提示されるが、続くバーゼル公会議の時代には、公会議に敵対的な議論も定式化され、公会議優位の意見を採ることは異端的であると主張された。16世紀初頭のピサにおける公会議開催をめぐる問題は、教皇主義と公会議主義との対立を先鋭化させ、前者の立場のカイエタヌスが教皇の公会議に対する優位と単独行為の権限を強調したのに対して、後者の立場のアルメイソンらパリ大学の論者たちは全体教会および公会議が裁治権においても教皇に優位し教皇は法によって制約されると論じた。こうした両極化に対してビトリアは、既に『教皇・公会議論』以前の著作で、対立から距離をおく姿勢を示していた。

第2章後半は、教会法学における特免概念の展開の歴史と、中世末期における特免授与実践の状況を確認する。11世紀から12世紀の教会改革期の学者シャルトルのイヴォは、教会法の本質を慈愛と衡平に求め、法適用の営みを魂の治療行為としての司牧と結び付け、特免はそのための手段であるとした。しかし『グラティアヌス教令集』以後の法学者たちはイヴォとは異なり、特免を権力行為として理解した。ルフィヌスは他の制度と区別しつつ特免を厳格に把握し、特免には根拠が必要であるとした。更に彼は、自然法および厳密には自然法とはいえない法を、特免できない規範とした。一方、12世紀末以降教皇令を検討対象とした教会法学者たち（デクレタリスト）は、教皇は根拠がなくとも実定法、使徒の規範、更に自然法の一部も特免できると論じた。彼らも複数聖職禄の特免は批判したが、教皇の十全な権力の理論ゆえに、実質的な制約はなされなかった。実際、中世末期には教皇庁の部局である内赦院が日々多数の特免を付与しており、16世紀初頭には聖職に関する特免が更に増加した。

第3章「トマス・アクィナスの『神学大全』における特免論」は、ビトリアの議論の前提となっていた13世紀のトマス・アクィナスの特免についての議論を『神学大全』第2部第2部分第90-108問題を史料として検討し、その基本構造と特徴を確認する。トマスの説明によれば、法は共通善と衡平を実現すべきであるが、法がそうした本質を欠くことを明示するのが特免である。その際に彼は、緊急時における法の適用除外をも特免と呼び、法の一般的妥当を前提として個別的に法的義務を取り除く行為に特免を限定しない。更にトマスは、神法のうち十戒は神によっても特免されえないとするものの、自然法の中で原理そのものであるような規範と原理から導出された結論であるような規範とを区別し、自然法であっても前者の規範以外は特免可能であると見なす。まして人定法は、個別性や認識の不完全によって限界づけられた偶然性の高い法であるため、トマスによればあらゆる人定法は特免されうる。全体にトマスは法に高い基準を要求しており、それに対応してその基準から外れた法の特免をも広く認めることとなった。

第4章「ビトリアのトマス注解における法と特免」は、第3章が扱ったトマスのテキストに対するビトリアの注解を史料として、トマスとの対比でビトリアの特免論の特徴を指摘する。ビトリアは、特免に法の欠如を宣言するという性格を認めず、法適用を一般的に排除するには不十分な根拠しか存しない場合において、個別に義務を解除する行為であると説明する。彼は緊急時における法適用の排除や無知による免責と特免とを区別し、特免は法的義務の解除であると理解する。そして特免の根拠としては単に利益があるというだけでは足りないとして、必要な根拠を詳細に論じる。またビトリアは、特免が有効であるかどうかという問題とは別に、ある行為が良心の法廷において罪にあたるかどうかという問題が存在し、根拠のない特免はその意味での罪を取り除かないと述べる。自然法についてビトリアは、たとえ特免が有益な場合であっても、君主による特免を認めず、トマスよりも広範に特免の限界を主張する。実定法については、損害を伴う場合であっても君主は特免できるが、しかしそれは慣習によって制約されると述べる。ビトリアは更に立法と特免とを区別し、君主が立法によって制度を変更することはできても、特免で例外的措置を行うことは、他人の損害を伴い、一般的有用性がなく、衡平を損なうので、認められないと主張する。このように、ビトリアはトマスと比べて、特免に対する制約の範囲を広げ、特免に固有の問題性を強調している。

第5章「ビトリアの『教皇・公会議論』」は、以上の第2章から第4章までの検討をふまえて、『教皇・公会議論』のテキストを分析する。ビトリアは、神法および自然法が特免不可能であることを定式化し、不正な特免がもたらす害悪を明確化して、実質的に法を廃止するのと同じ結果をもたらすおそれがあるとする。また特免は個別的であるゆえに不確実で人間の恣意に服しやすいものであり、不正に濫発される危険があると論じる。その一方で、実定法の中にも神法を支えておりそれが危険にさらされれば神法も危うくなるような法が存在するとして、上記のような問題をはらむ特免の作用から守られた、特免できない実定法という観念を提起する。そして何がそのような実定法であるかは、信仰と神法に関する宣言において不可謬の公会議が宣言するが、法の性格や拘束力については制定者が誰であるかとは別にいわば本質主義的に把握しうするため、公会議の行為は教皇の権力を損なうことにはならないと見る。このようにビトリアは、特免できない実定法という構想を提示するにあたって、教皇と公会議のいずれが他に優位するかという問題を回避することに意を用いているが、そのように特免できない実定法について教皇による特免が行われた場合の帰結を論じる際にも、彼の主張が教皇の至上性を損なうことにならないよう、良心の法廷とそこにおける罪のレベルへと議論をシフトさせる。そのような特免も有効であるが特免を与えた教皇は罪をなすことになり、特免を利用する者も罪を犯したことになる。特免の影響を受ける第三者も有効な特免に従う義務があるが、良心の法廷のレベルでは従わなくても罪にはならない。更に特免にもとづいて教皇が具体的な命令を発してきた場合には、司教たちないし地方公会議に主体を限定したうえで抵抗の可能性を認め、特免できない実定法という構想に現実的意味を持たせる道を残そうとする。以上のような主張を正当化するために、ビト

リアはカイエタヌスなどの教皇主義者、教会法学者、トマスなどを援用するが、その際の彼の先行テキスト利用は、意味の引き伸ばしや置き換え、あるいはアナロジーを介して、彼独自の見解へと組み込むものであった。

論文末尾の「結論」は、それまでの行論を要約して、ビトリアが教皇主義と公会議主義の対立という隘路を慎重に切り抜けつつ、先行する論者の議論を基礎としつつも独自の考察を展開して、決して特免しえない実定法を公会議が権力性を伴わずに提示するという主張に到達し、「基本法」的法理解を提起したと論じる。

以下、論文の評価を述べる。

本論文の長所としては、第一に、サラマンカ学派研究に対する重要な貢献となっていることがある。サラマンカ学派の学者たちについては、本格的な分析が遂行されていない重要著作がなお数多く存在するが、本論文は、学派の初期を代表する学者であったビトリアの『教皇・公会議論』を詳細に検討し、従来の研究の欠落を埋めている。これはビトリア研究を大きく前進させる成果であり、更にビトリアが後続のサラマンカ学派の学者たちに与えた影響を考えれば、サラマンカ学派全体の理解にも資するところが大きい。

第二は、ビトリアのテキスト読解にあたって、トマス・アクィナスの『神学大全』、ビトリア自身による『神学大全』に対する注解、ビトリアが先行する論者を参照する手法などを考慮に入れて、ビトリアの学説の特徴を鮮明にしている点である。サラマンカ学派の学者たちが先行する中世以来の伝統を前提として論じていることは、この学派を研究する際のハードルを高くしてきた要因であるが、本論文はトマスをはじめとする先行学説とも本格的に取り組むことを通じて、それらを踏まえて展開されたビトリアの議論の重層性と複雑性をよく再構成し得ている。このことを通じてビトリア独自の貢献もまた明瞭に浮かび上がることになった。

第三に、特免という注目すべきテーマを正面から採り上げて考察したことも本論文の特長といえる。特免に関しては神学史・教会法学史上の先行研究も乏しく、ビトリア研究においても注目されてこなかったが、本論文は『教皇・公会議論』を対象に、このテーマに関するビトリアの繊細な議論を提示した。ビトリアの特免論の後代への影響についてはなお今後の検討を要するとはいえ、法の一般性と個別性に関わる特免という興味ある現象についての、堅実な歴史的検討となっている。

他方で、本論文には問題点もなお残っている。第一に、史料のラテン語テキストを日本語に移す際に、同じ原語に異なる訳語をあてたり、テキストにおける論の順序を入れ替えたりしている個所が散見される。そのためそうした個所では、論文の読み手にとって、史料の論旨や議論の流れが不鮮明になっている。

第二に、ビトリアの問題意識・立論と宗教改革との関係や、ビトリアの学説における良心の法廷と罪の問題の意義など、ビトリアのテキストの同時代的側面をもう少し考慮に入れて読解する余地もあったのではないかと思われる。宗教改革との関係については論文中で

簡単な言及があるが、ビトリアがとりわけ問題視した特免事例をよりクリアに特定するなどして、プロテスタント側の主張やそれに対処するカトリック側の反応に関してビトリアがどのようなスタンスで臨もうとしていたかを、更に解明する可能性も存したであろう。

しかし、これらの問題点は、今後の作業によって改善可能であり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士（法学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。